

私からみた構造改革（上）

——初岡昌一郎氏に聞く

はじめに

今日はこういう会合にお招きいただき、大変光栄に思っております。

私はこの研究会にお招きいただいて本当に光栄なのですが、みなさんのご期待に沿えないのではと心配しております。実は、話を頂いた加藤宣幸さんに固辞したのですが、「約束したから」と強く加藤先輩に背中を押されて出ささせていただきました。社会党の構造改革論議に関して、私が関係したことはほんのささやかなことで、きっかけをつくったにすぎないのです。その点は貴島正道さんの『構造改革派』（現代の理論社、1979年）の中で触れられております。

ただせっかくこういう機会をいただきましたから、振り返ってみて構造改革論が自分にとってどういうものだったのかを回想してみる良い機会と思い、あえて引き受けさせていただきました。

最初余談から入らせていただきたいのですが、日本経済新聞から、曾根英二『限界集落』（日本経済新聞出版社、2010年）という本が出ております。彼は山陽放送の記者で岡山県の北部を定点観測的に何年も足を運んでこの本を書

いています。

この本は、ちょうど私が生まれた地方を対象としています。私は最近自分が生まれた郷里に帰ることがなく、出身高校がある岡山県津山までときどき帰るだけとなっています。これまで限界集落化が島根県とか鳥取県では相当進んでいると承知していましたが、まさか岡山県で自分の故郷があのようになっているとは知らず、驚いてしまいました。

備中の新見市は、岡山県の県北中核都市で、私はそこで幼稚園と小学校2年まで過ごしました。この本によりますと、もはや新見には産院もなく、火事があると消防車を鳥取県から呼ぶそうです。中核的行政サービスが喪失している限界集落では、町村合併により旧来の村落の中で公的機関がなくなり、学校や郵便局すらもなくなってきました。時たま巡回して来る行商人に託して送金や公金納付をするというような現状が、岡山県北部の集落で既に見られるのです。

生い立ち

生まれたのは岡山県、今は新見市の一部になっていますが、当時の阿哲郡神代村です。卒業

本稿は、法政大学大原社会問題研究所の研究プロジェクト「社会党史・総評史研究会」の第3回研究会の記録である。研究会は2012年7月22日（日）に法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階丸（円卓）会議室で開かれた。出席者は、五十嵐仁、岡田一郎、中根康裕、南雲和夫、浜谷惇、栢田大知彦、山口希望、木下真志である。事前に初岡氏宛に提出した質問状にこたえていただく証言（今号掲載）とその後の質疑応答（次号掲載）に分かれている。読者の便宜を考えて、適宜、中見出しを付した。（木下 真志）

した小学校は本当に小さく、同級生は8人。複式の授業で、1年から3年までが1クラス、4年から6年までが1クラスでした。小学校4年のときに終戦になり、卒業まで本当に勉強したという記憶がほとんどないのです。

あまりにも中学が遠かったものですから、東京に住んでいた伯父が、東京で中学に行くようにと呼んでくれました。伯父の家から東京都武蔵野市立第一中学校に行きました。

昭和24年に出てきたとき、東京はまだ焼け野原が目立ち、東京駅の前でビルらしいものは丸ビルがあったぐらいです。みすばらしい運動靴をはいて上京してきたものですから、伯父が見かねて丸ビルの地下で革靴を買ってくれたのを覚えています。お茶の水駅反対側の川縁には、掘立小屋が密集しているような状況でした。

吉祥寺という都会の中学校に、岡山弁を話す子どもが田舎から来たわけですが、1年生の2学期目には学級長に選ばれました。それから3年になると生徒会長もやっています。それらは選挙です。今ですと田舎丸出しの子どもはいじめの対象になるかもしれません。戦後の雑然とした時代で、みんな疎開の経験もあるし、誰がどんな言葉話すかというようなことは問題にならなかったのでしょう。当時は、ほとんどの人が貧しかったけれども、非常に自由で闊達な雰囲気がありました。

高等学校進学は、自分の希望通りになりました。と言いますのは、私は生まれたとき

に両親がすでに離婚しておりまして、母方の祖父母と母の兄にあたる伯父夫婦に育てられたのです。高校も東京で続けたかったのですが、高等教育を与えるために引き取ることに同意した、岡山県真庭郡久世町の父の元に帰りました。

必ずしも自分が志望していたわけではありませんが、いろいろな理由がありまして、公立の高校ではなく、開校したばかりの津山基督教図書館高校という非常に変わった学校に行くことになった。創業者森本慶三先生(1875~1964)とそのご一家を父が尊敬しており、今まで一緒に暮らしたことがない息子の薫陶を託したかったのだと思います。教頭であった後継者の森本謙三先生には、卒業前の一年間、ご自宅に寄宿させていただき、お子さんたちと一緒に生活させていただきました。これがたぶんその後の自分の人生にとって決定的に大きな影響を与えたと思っております。普通の高校に行って受験勉強をして進学していたら、違う方向に行っていたかなとも思います。

この高校は、森本慶三という内村鑑三(1864~1930)の直弟子によって創立されました。慶三先生は東大農学部を出た後、郷里の津山に帰って町の真ん中に私財を投じて図書館を建設しました。森本家代々は、錦屋という津山随一の商家であり、津山藩の筆頭御用商人でもありました。

津山はあまり裕福な藩ではないのですが、御

初岡昌一郎氏略歴

1956年 津山基督教図書館高校卒業
 1959年 国際基督教大学卒業
 1959年 社会主義青年同盟結成準備会専従役員
 1963-64年 ベオグラード大学法科大学院留学
 1964-72年 全通信労働組合本部書記局長
 1972-89年 国際郵便電信電話労連東京事務所長
 1989-2006年 姫路獨協大学教授
 現在、ソーシャル・アジア研究会主宰

三家に次ぐ格式のために出費がおおく、苛斂誅求を極めたので、よく農民一揆が起きていました。幕末に藩がつぶれたときに、森本家は津山藩城代家老が住んでいた家をはじめ多くのものを手に入れた。ちょうど津山の城の大手門正面の両側に森本家の大きな屋敷がありました。

森本先生は東大を卒業して帰ってくると、代々の商売をやめてしまい、図書館を拠点にキリスト教の伝道を始めました。戦後は高等学校に行く機会がない人のために、津山で初めての夜間高校を創立しました。その前身としては、戦争前に鶴山中学という私立学校を開いて教育の機会に恵まれない人を対象にしていました。戦時中は軍事教練の強制を受けて、結局廃校に追い込まれました。

鶴山中学には朝鮮人や中国人など、公立校で勉強する機会を与えられなかった人もいました。のちに神戸華僑総会会長として、在日華僑子弟の教育と日中関係に大きな功績を遺した林同春（1925～2009）さんも森本先生に救ってもらってその学校に入りました。生前、林さんは毎年いつも律儀に先生宅に表敬に来ておられました。林さんは、その遺書となった『わが心の自叙伝—二つの故郷』（神戸新聞連載、2007年、エピック社出版）という自伝で津山における少年時代と森本先生についてふれています。彼はその本の結びで、「もし将来日中がふたたび相争うときが来れば、二つの故郷いずれにも銃を向けられないので、自分に向けるしかない」と書いていました。

この高校には音楽もなければ体育の教科もない。よく高校として文部省の認可になったなと思います。文部省からの補助金をもらっておらず、まったく森本家の私財で自主的に運営していたからです。そしてお金が尽きた時に、この高校は存在しなくなりました。

今は高校がなくなり、図書館と自然科学館が

残っています。ずいぶん多数の動植物を収集されており、津山市の名所です。津山はほかに何もないものですから、天皇陛下がみえても市が連れて行くのは森本家の二つの博物館ぐらいだと言われているのです（笑）。それらは苦労しながら、お孫さんが維持しておられます。

そういう変わった高校に行きましたので、大学の受験勉強なんか全然しませんでした。ほとんどの人が高校を出ると実業に入ってしまう、大学に行く人は本当に少数しかいなかった。そういうところで、自由な時間がおおく、図書館の所蔵する思想的哲学的な本を分からないなりに読みあさっていました。

国際基督教大学へ

大学は、森本謙三先生が「初岡君、新しく国際基督教大学ができた。受験勉強は必要なし、あそこに行きなさい」ということになり、推薦を受けて受験しました。当時は激烈な競争ではなかった。私は3期生で、大学はまだ完成途上でした。振り返ると、中学は新制のほやほやでしたし、高校も一期生、新しいところばかりに行っております。卒業した小学校と高校はもはや無くなりました。

話が飛びますが、自分がその後大学を出て半生を過ごした組織もほとんどなくなるか、姿を変えています。変化の速さには驚くばかり。結成に参加した社会主義青年同盟（社青同）はとくに消滅したし、7年間在職した全通も形を変えて、存在しません。社会党もない。総評もない。東京事務所長として25年間働いたPTTI（国際郵便電信電話労連）もない。そのような激変、激動の時代でした。変化の時代では、経験をつたえることが困難です。小学校や高校時代の話を自分の子どもに話しても、実感をなんら伝えることができない。これは私だけではなく、非常に大きな激変を経験してきた世代に共

通したことでしょう。

構造改革論には今でもその影響を受けているのですが、加藤さんや貴島さんと少し違う受容をしているかもしれません。それには、世代と経験の相違が反映しているかもしれません。

ICUの学生時代は英語で悩まされました。あとになって思うと、大学時代に学んだことで後実際に役立ったのは英語しかなかったかもしれませんが、その当時は英語中心の授業に非常に不満でした。そこで異なる学生生活を求めて、まず社会科学研究会（リベルテ）に入り、学生運動に熱中しました。当時の学生運動の一般的な主流は、歌って踊れば平和が来るという民青路線でした。これは1955年で共産党が路線転換し、学生運動も労働組合の職場闘争にヒントを得たと思うのですが、例えば寮の飯を改善しようとか、大学の中の生活を改善することを主眼としていました。たまたま私は音痴で、踊ることもできないので、これには魅力を感じませんでした。

1年生のとき、これは1955年ですが、大きな一つの転機がありました。もともと政治的社会的問題とか平和運動とかに関心を持っていましたので、岡山選出の江田三郎（1907～77）さんのところにも出入りしておりました。当時は古い参議院会館で、しかも小さい部屋でした。そこで、社会党青年部の事務局長として上京してきた岡山出身の仲井富（1933～）さんと出逢いました。彼は、江田さんの事務室で起居していたのです。

僕は三鷹の井の頭公園裏にある東京神学大学教授で、バルトの研究者として知られていた井上良雄先生（1907～2003）の非常に立派な家に寄宿していた。一緒に部屋をシェアしないかと言ったら、それではそこに行こうということになって、仲井富さんと一緒に1955年夏から約半年間、三鷹市下連雀の井上家に同居しまし

た。砂川闘争にも一緒に出掛けるようになり、仲井さんから青年部に入って運動をやらないかとの誘いを受け、何の抵抗もなく社会党へ入りました。活動の場は、当時の左派社会党青年部です。社会党はその年の暮れに左右統一するのですが、青年部統一は1年ぐらい遅れて実現しました。

このように大学の1年生であった55年の後半は、砂川闘争にのめり込みました。砂川闘争で学生運動がみるみる活発になりました。当時の動員主体は都学連でしたが、表面に出てくるのは全学連。当時の都学連は土屋源太郎委員長とか、副委員長をやっていた塩川喜信さんとか、あとで自治労に行った吉沢弘久さんたちが中心でした。かれらは、今も砂川の会を続けており、まだ熱心に活動しています。

国際基督教大学は全学連に加盟しておりませんでしたから、社研レベルで連絡を取り、成蹊大学とか東京女子大、一橋、津田塾、東京経済大学と連携していました。そして、三多摩社研連を結成しました。三多摩社研連で砂川闘争に関して立派なパンフまで出しました。この間、吉沢さんの会のメンバーがそれを持ってきて見せてくれました。忘れていたのですが、見たら国際基督教大学リベルテ（社会科学研究会）内で発行したことになっているのです。

そのうちに三多摩社研連を発展させ、以前にあった全国社研連か関東社研連を再建しようということになり、法政、早稲田、東大、明治など大きな大学を回りました。関東社研連再建と同時に、その書記長をすることになりました。以前の大学社研は共産党の牙城、マルクス主義の牙城だったのですが、当時これらの活動家はほとんど全学連とか自治会に出てしまっていて、社研はどの大学も比較的小となしい勉強会的なカラーになっていました。

そのうちに目立って来たのが新左翼の台頭で

すね。はじめのうちはまだブントが登場しておらず、社会党青年部の活動家だった栗原登一（1930～2009）さんとか黒田寛一（1927～2006）さんとか、もうちょっとクラシックな左翼でした。それから政治党派には属さないけれども、新左翼的な傾向の人びとが当時の社研にはいました。それからわれわれみたいな、どちらかというとなかなか穏やかな左翼で社会党に近い人びとと、三つぐらいの要素が混在していた。法政とか明治とか、いくつかの大学は共産党がわりかた強かったのですが、東大、一橋とか、早稲田など大きなところが共産党系中心ではなかったのです。

松下圭一さんとの出会い

だから理論的には非常に雑然とした状態で、ある意味では非常にリベラルでした。われわれの関心の一つの的は、当時法政大学法学部の助教教授だった松下圭一（1929～）さんの提起した、大衆社会論でした。これは1956年ごろです。『現代政治の条件』（中央公論社、1959年）『市民政治理論の形成』（岩波書店、1959年）『現代日本の政治的構成』（東京大学出版会、1962年）などにその当時の論文が入っている。私も松下さんの提起は非常に新鮮なものがあると感銘をうけました。民主主義そしてとくに市民的自由、それから市民的自由を通じての自主的な組織の重要性というようなものを、松下さんは指摘しました。

今読んでみますと、松下さんはマルクス主義の教養が豊かな人ですから、マルキシズムの側からの批判を非常に意識して書いているのに気づきます。労働者の存在形態が変わったことに注目せよと述べているのに、階級関係が変わったのではないということを繰り返している。そうは言いながらも松下さんは、存在形態が変わればそれに対応する戦略と運動も変わら

なければいけないということも言っているわけです。批判するほうの側もそこを捉えて、芝田進午（1930～2001）さんをはじめ、マルクス主義の否定であるということで大衆社会論を強く批判しています。松下さんは変革の主体を政党とか労働組合とか、あるいは学生運動にかぎらず、広く社会的政治的運動として捉えていた。彼は、時代の変化とそれに対応する意識と運動を鋭角的に提起していた。松下さんの提起は非常に広範に渡っている。例えば、社会民主主義についても、松下さんは早くから再評価の対象としていた。

私は行動的な学生でしたので、興味深い論文が出たらすぐその著者に会いに行きました。編集部で電話すると、すぐ教えてくれたのです。今だったら個人情報の秘匿で絶対にそういうことはできないと思います。松下さんに会いに西荻窪に行ったら、6畳ぐらいの狭い部屋に万年床が敷いてあって、それを二つに折って座るところをこしらえてくれました。松下さんは話の好きな人で、初めて言った未知の学生に2時間ぐらいも割いてくれ、ああ、これは面白い人だなと気に入ってしまいました。

社会党の仲間との研究会

当時社会党青年部の仲間は、はじめから思想的に江田派だったわけではありません。私は、岡山県人なので江田さんの周囲にいた人たちと早くから個人的に知り合う機会がありました。それを通じて、社会党本部書記局江田グループの中心であった加藤幸直さんとか森永栄悦さん、貴島正道さんの知己を得ました。

その中でまとまりの中心となっていたのが加藤さん、理論的な関心を特に持っていたのが、議会政策を担当していた貴島さんでした。貴島さんは九州大学法学部政治学科出身で、具島兼三郎（1905～2004）の影響をかなり強く受け

ていた人です。加藤さんや貴島さんと松下さんのところに一緒に再度行き、それから松下さんと江田派の交流が始まりました。

だいたい56年、57年ぐらいから革命論争が盛り上がり、大月書店から現代マルク主義講座全3巻や上田耕一郎（1927～2008）さんの『日本革命論争史』（大月書店、上巻1956年、下巻1957年）も出て、新しい刺激が与えられた。それらとは違う社会民主主義の立場からのシュトゥルムターレ『ヨーロッパ労働運動の悲劇』（岩波書店、1958年）を特に愛読しました。この本は、労働運動をイデオロギー的に評価するのではなく、構成員の利益代表としてプレッシャーグループとして行動するのか、広い社会的経済的利益を代表するのかという視点で捉えていました。この本を下敷きにして、戦後日本労働運動論を卒論に書いたほどの惚れ込み方でした。

大学時代後半から社青同時代にかけて政治理論と運動論の面で最も影響を受けたのは、何と言っても佐藤昇さんからでした。57年8月の『思想』に発表された「現段階における民主主義」という佐藤昇論文は衝撃的でした。郷里での夏休みを早々と切り上げ、姫新線で姫路に出て山陽本線に乗り換え、東京に向う途中のことでした。地方都市の駅前書店でも『思想』を店頭で売っていました。夜行列車で読み始めたら、夢中になってしまい眠れなくなった。

この佐藤昇論文は、今再読するとなぜそこまで感激したのかと思うのですが、当時は非常に新鮮で、いろいろなところにカギカッコをつけ、線を引っ張っています。東京駅に着くとすぐに岩波書店に電話して聞きだし、佐藤昇（1916～93）さんに連絡しました（笑）。当時まだタス通信の支局におられたかと思うのですが、数日後に佐藤さんに会ってもらうことになりました。貴島さんの本の中に出てくる喫茶店の名前

ではなかったと思うのですが、場所は渋谷で、井の頭線沿いの裏通りにあった小さな喫茶店でした。これを契機にそれから後の2、3年間は、豊島区要町の佐藤さんのご自宅によく通ってゆきました。大学在学当時から就職を全く考えておらず、漠然と文筆で飯が食えるといいなと考えていたのですが、佐藤さんのように頭脳明晰で筆の立つ人が苦しい生活を強いられているのを見ると、そのような幻想は吹き飛ばされました。

佐藤さんという人は共産党の中の論争とか党内闘争でたたき上げた人だけに、一見複雑に見える諸問題の整理と重点の摘出を簡潔に行い、そしてそれらを論理的かつ判り易く説明するのが実に巧みなのですね。「民主主義の主要な側面は三つある。それぞれの側面の中の主要な契機は、以下の三つ」という具合に、だいたい三分法でパッと手際よく整理してもらうから、15分、20分のうちにわかった気になります。実に明快でした。この手法は、例えば山岸章（1929～）さんなんかも、大会や会議での発言や報告にずいぶん後々まで応用していました。それぞれの異なる次元で、三分法で問題を整理していくのは、理解を広く得るのにいい方法だと思いました。私も後々まで方針や報告を書くのにこの方法をしばしば援用しました。

佐藤さんは、戦略戦術や綱領的な問題の立て方からものを明確に捉えるのに非常に優れた人で、貴島さんや加藤さんをはじめ、ほかの人たちもこれに魅了されました。みんな当時の社会党に飽き足らず、新しい路線を模索していました。安保闘争直前、大衆運動が高揚するにつれ、社会党も今の状況の中では十分に対応できず、あまりにも方針とか依って立つイデオロギーや戦略が古すぎると痛感していたので、一挙に佐藤さんに傾斜して行きました。

ただ最初の研究会を組織するにあたっては、

佐藤さんだけではなく、松下先生などもっと広く党内外の協力を得たほうが良いと考えていました。そこで、佐藤さんを囲む研究会ということではなく、もう少し自由かつ幅広く議論できる研究会にしたほうが良いというのは、佐藤さん自身の意見でもありました。当時の研究会の名称は忘れてしまったのですが、特別に固有名詞をつけていなかったのではないかと思います。不用意に外に漏れて、参加者に迷惑がかかるのを心配していたからかもしれません。例会は、加藤さんの知人が経営する、四ツ谷駅前にある東洋交通というタクシー会社の2階で行われていました。研究会の部外メンバーは佐藤さんと松下さんに相談をして選定してもらったのを覚えています。

佐藤さんは上田耕一郎さんをまず推薦された。上田さんという人は非常にすばらしい人で、共産党に残られても亡くなるまで私は年賀状の交換をしていました。いつも必ず自筆で数行書き添えた賀状をいただいていた。党派を超えて、人間的に本当にすばらしい人だなと思いました。

上田耕一郎さんの思い出

ちょっと話が横道に入ってしまうのですが、清水慎三（1913～96）さんが亡くなられた後に追悼会が総評会館でありました。社会党からは高沢寅男（1926～99）さん、共産党からは上田さんが代表で清水さんの思い出と評価を話されました。上田さんは相変わらず周到なる用意をしてこられて、非常にいい話をされた。私はそのときに何十年ぶりかで上田さんにお会いし、私たちのソーシャル・アジア研究会で「話をしてもらえませんか」と頼みました。快諾を得ましたけれども、「どういう話をしたらいいのか、打ち合わせもしたいから来てくれ」と言われました。生まれて初めて、代々木の共産党

本部に行くことになりました。代々木駅で降りて左に行ったらすぐに分かるはずだと思っていったら、ぜんぜん分からない。共産党本部はこのへんにあったはずなのにとうろろうしたが、分からない。もとに戻って交番に聞いたら、鳥籠みたいなものを被って改修中のビルがそうでした。

上田さんは「いや、今苦勞しているんだよ。俺が改築委員長を引き受けたものだから」。つい「上田さん、これはどこの建築会社がやっているんですか」と聞いたら、「これは戸田建設だよ。共産党系の建設会社だって、これぐらいのビルはいくらでもつくれる。ただトラックを出入りさせるのに、町内会を仕切るのがゼネコンじゃなきゃできない。いろいろ調べたらゼネコンの中でいちばんマシなのが戸田建設だと分かったから」というお話でした（笑）。

上田さんはそういう非常にざっくばらんで、親しみのもてる人でした。我々の研究会のときも準備を周到にしてみえました。お茶の水の中央大学同窓会会館で話を聞いたのですが、あの上田さんもかなり古めかしくなったなと感じました。というのは、共産党もニュールックの方針が出ているが、アジアに対する方針はどうかと質問した。ところが、上田さんが評価するのはシンガポールのリー・クアンユーとマレーシアのマハティールなのです。アメリカから自立しているという、その一点からです。

上田さんがかつて前述の研究会で指摘され、そしてまたあと『思想』の組織論特集号で書かれたことで非常に印象に残っているのは、あらゆる組織は、政党も労働組合も企業も含め、時と共に垢がたまって守旧化する。だから絶えず自己革新を図らなければ、自らの目指す目標は達成できないと非常に力説されていたことです。

上田さんの頭の中には当時の共産党というも

のもあったと思うけれども、この党も自己革新がない。いずれの組織も自己革新がいちばん難しい。他に対して変われと簡単に要求できるけれども、自分を変えるのは非常に難しい。この数十年、自己革新を怠ったツケは、今の日本でいろいろなところに出て来ていると思います。

研究会から社青同へ

その研究会も1年ぐらい続いただけでした。松下先生が紹介した人は田口富久治（1930～）さん、増島宏（1924～2011）さんなどの政治学者、ほかに中林賢二郎（1919～1986）さん、北川隆吉（1929～）さんがいました。法政の方が多かったように思います。そうこうするうちに、加藤さんたちは社会党内で構造改革論をどんどんと方針化してゆきました。すでに貴島さん、加藤さんが言われているように、構造改革論を社会党の政策の中に取り入れていく努力が同時進行していました。だから、悠長なサロンのような研究会ではニーズにこたえられなくなりました。

私は当時まだ学生で、社会党本部書記局員ではありませんでした。大学を出る前後から、自分の重点が社会主義青年同盟を結成することに移っていました。加藤宣幸さん、森永栄悦さん、貴島正道さんたちと別れたわけではありませんが、あの方たちは社会党本部の中心的な専従書記局員で、より党内的に実用性の高い研究所とか研究会をつくることに向かっていた。そのころになると私はもうこのプロセスから離れていました。ですから社会党が構造改革に向かう党内的プロセスには、ほとんどタッチしておりません。

私は社青同を結成するために、大学卒業後、どこからも給料をもらわずに、東京で社青同結成に没頭していました。全国準備会にも入っていましたが、東京でまず活動を始めていた。

大学4年生のときすでに社会党東京都本部青年部書記長になっておりましたが、青年部を廃止して社青同をつくることを青年部大会に提案した。ところが、当時の社会主義協会から「別党構想を歩むものである」、つまり社会党から離れて別の党をつくらうとするものであるという批判を受けて、論戦の末、都青年部大会で否決されてしまいました。僅差ではあったけれども負けました。

当時の協会は後年の協会とは違って、党体制内的な協会、つまり社会党のために存在する協会でした。その後、協会はだんだん純化(?)して党内外で少数派になっていくのですが、そのプロセスが始まるころだと思います。

この時に私とともに奮闘したのが、国鉄大井工場出身で国労青年部の山下勝さんでした。彼が東京の初代社青同委員長となり、その後全国社青同が結成されると彼は本部副委員長を兼任した。彼はのちに総評の専従青年対策全国オルグにもなった。私は彼と組んで、いわゆる構革路線を社会主義青年同盟の中に持ち込むというか、それで組織を作ろうとした。

そのときの方針としては、従来のような国際情勢、国内情勢の分析から始まって、網羅的なものとしなくて、もう少し中心的な柱を立てようと思いました。一つは平和、非同盟、非武装。二つ目の柱は民主主義の徹底。三つ目に社会経済構造の改革というものを打ち出したのです。それらのいずれもいろいろと議論があったところですが、社青同大会議案原案のその部分が私が書いたのですが、途中で論議がいろいろあってそれほど鮮明なものにはならなかった。

当時社青同の理論的なドンは、社会党青年部当時からずっと面倒を見てもらっており、社会党青年部の主な内輪の会議に出ていた清水慎三さんでした。清水さんの立ち位置というのはなかなかファインチューニングされたもので、今

から考えると非常に玄人好みのものでした。あの人が最後にまとめた『戦後革新の半日蔭』（日本経済評論社、1995年）の「半日蔭」というところが非常に清水さんらしい表現です。清水さんも岡山人で、清水さんのところに行くときよく岡山弁でわれわれは話をしていた。仲井さんによれば「初岡君、お前が岡山県人だから清水さんは許容しているけれども、そうでなかったらとっくに放り出されているぞ」。清水さんの奥さんも非常にいい人でした。清水さんの息子（克郎）さんは現在、岩波書店に勤務しており、真面目な人です。

清水さんの影響力は左派青年部活動家の間で強かった。われわれからみると清水さんの理論は、どちらかという社会党と共産党の折衷的な匂いが非常に強い。清水さんの政治的な立ち位置というのは総評の高野派に非常に近く、そののちには太田薫（1912～98）さんに近かった。太田さんも岡山の人で、清水さんも太田さんも岡山六高出身ですね。

社青同専従として

社青同準備会当初、私は東京の書記長と本部の組織部長を兼任しました。専従といっても初めてのころは別に給料はもらっておらず、地方に行くとき、その地方の中心的人のところ泊めてもらい、その次のところまで送ってもらうというような、非常に非組織的な戦前の社会主義運動的やり方でした。

準備段階では、三池と安保の闘争の中から社青同をつくるという方針を打ち出していた。私自身も、1958年末、1ヵ月ばかり三池炭鉱にオルグで行っていました。まだホッパー決戦などの大闘争に発展する前の段階でした。三池闘争の評価は社青同結成後の大論争の一つの大きなテーマになり、政策転換闘争をどう評価するかが議論の焦点となりました。

社青同を結成する段階では、すでに本部段階で協会派と一定の合意ができていました。社青同の本部中執として協会派から3人が入りました。その当時の社会党青年部協会派の中心は上野健一さんでしたが、中執には千葉から石井久君、自治労本部書記局員からまず田中義孝君が、次いで吉沢弘久君がはいりました。

全学連主流派との付き合い

吉沢君と今は本当に仲がいいのだけれども、当時彼は協会というよりは「隠れ新左翼」だったようですね。早稲田の森川友義先生が全学連副委員長だった小島弘さんたち6人にインタビューした『60年安保』（同時代社、2005年）を読むと異口同音に皆さんが、森田実さんが良くも悪くも指導の中心だと云っている。その中で古賀康正さんという東大農学部先生になった人が、吉沢君のことを書いているんです。古賀氏は相撲が強く、相撲でほとんど負けたことがなかった。ところが吉沢という小柄な奴が挑戦してきて、そいつに投げられて腰を痛めたという。彼はあとで社会党に「加入戦術」で入ったなんて書いてある（笑）。

話が脱線して申し訳ないのですが、江田五月さんが参議院議長になったときに、上野の東天紅で、日本女子大の高木郁郎君とか明石書店の石井昭男君とかが発起人になって、激励する会を旧社青同学生班OBが主催しました。僕は当時の社青同学生班ではなかったのだけれども、呼ばれてゆきました。社青同学生班といっても、出席者の3分の2ぐらいが東大OBでした。社青同学生班は東大グループが中心だったし、東大グループの中では協会が強かった。「あれ、吉沢君がみえないじゃないか」と言ったら、「いや、あれは派が違う」なんてまだ言っている（笑）。

香山健一（1933～97）さんとか森田実さん

とか当時の全学連指導部の人たちは、個人的にいろいろ付き合っていました。政治的な主張がかけ離れたところもあったけれども、彼らには、能力に対する評価と人間的な信頼感をもって。後々、香山さんは亡くなるまで、森田さんとは最近あまり会っていませんが、長い間付き合ってきて、非常に人間力もあるし、広い世界で活躍しうる人だと思いました。

僕も若いとき加藤さんとか森永さんにたいし、「社会党にもいわゆる構革派という人だけを採用しようとしなくて、もっといろいろな人を入れたほうがいいと思う」といったことがありました。それで「誰かいるか」と言うから、「森田実とか」というと、彼らはびっくりして「お前、気でも狂ったのか」と相手にされませんでした。

社会党や組合が書記公募をやめたのは、公募すると誰が入ってくるか分からないという心配があったからでしょう。自治労は最後まで続けたけれども、ほかの組合は学生からの採用に閉鎖的になりました。新左翼に対する恐怖があったのです。森田、香山氏以降の学生運動活動家の中には、そういう懸念をまったく否定はできないものもあったと思います。

しかし、党や組合の書記局に公募で広く人材を採るという気風がなくなったことは、活性化に逆行しました。その点で、人間の可変性を非常に過小評価してしまう傾向が残念でした。派閥というのはとかく弊害を伴うのですが、一時期の立ち位置だけで人の価値を判断してしまう。構革派の中にもそういう弊害が無かったとは言えないと思います。本来構革派というのは、閉鎖的に固まるというよりも、開かれたものでなければいけないのです。

社青同のその後—ユーゴを経て全通へ

社青同発足時、当時東大三鷹寮にいた高木郁

郎君と秋山順一君らに働きかけて、社青同三鷹班を仲井さん、後輩の吉竹康博君たちと共にいち早く結成した。高木君は清水慎三さんに非常に近く、清水さんの紹介で卒業後総評に入るのです。社青同結成後は、高木君と僕はかなり意見が食い違ってきた。高木君は僕のあとの国際部長になるのですが、高木君たちは、社会主義協会がそうなのだけれども、非同盟中立というよりも、非常にソ連路線に近くなってゆく。僕はソ連に対してそれほど否定的ではないけれども、ソ連路線を社会党なり社青同が受容することはできないと考えていました。やはり独自の路線で行くべきだし、むしろ僕は外交方針上ではユーゴのほうに近かったから、彼らと対立しました。

何よりも社青同の中では三池闘争の評価ということで、政策転換闘争を容認するのかわからないので揉めました。この議論はもう代理戦争です。青年運動の中の問題というよりは、社会党や総評の中の問題。そういう問題で盛んな論戦があった。社青同は非協会のほうが多数だったけれども、それが必ずしも構造改革派というわけではなかった。

本当に僕が構造改革派で同志的に信頼できるなどと思うのは、山下勝さん、他2人ぐらいだったのです。協会のほうがこれをよく見ていて、大会役選では山下君と僕に不信任が集中した。不信任は次第に増えてきて、第3回大会の直後に僕は辞めるのですが、そのときにはもう過半数を下回ること数票にすぎなかった。この次は落選確実。ほかの人は7割から8割の信任率でした。

率直のところ嫌気がさしてきて、このままいったら組織内争闘の中で社青同と心しなければいけないことを懸念していました。当時の中央執行委員会と書記局で僕がいちばん若く、反対派との論争の前面に立っていました。

でも非生産的な論争に自分の人生を賭ける気がなくなっていました。もうこんなことは御免だ、という気持ちになっていた。その当時は形だけですけれども、社会党本部青年部副部長ということになっていた。これは本部が認知していたかどうかは分からないけれども、久保田忠夫さんが部長を引き受けるときに、その補佐役として指名されたものです。

僕が辞めると言い出したら、仲間みんなに反対されたけれども、賛成してくれたのは久保田さんだけだった。久保田さんは、「そうだな。こんな連中と付き合ったってしょうがないよ」という（笑）。「君、辞めたいならもう辞めていいよ」ということで、彼が、ユーゴに行く旅費10万円をどこかからカンパで募ってきて、船賃を工面してくれた。

そして1963年夏、大阪からユーゴの貨物船で1ヵ月半、スエズを抜けてユーゴスラビアに行きました。その当時、全通の第2組が大阪中央郵便局にでき、その対策で全通本部青年部長だった新井則久さんが大阪に滞在していました。彼は、社青同結成前の社会党青年部全国委員会時代から気の合う仲間でした。全通青年部は社青同の最大拠点であり、彼は総評青年協議会議長としても密接に活動していたが、彼自身は社青同役員にはなっていなかった。

新井君は非常に人柄がよく、成熟した苦労人でした。年も非常に近かったので、新井君とは本当に仲がよかった。新井君が最後にわざわざ大阪港まで送りに来てくれ、そしてまた1年たったあと彼に呼び返されることになる深い縁がありました。彼はその間に、非常な抵抗を受けながら青年部長から全通で初めて中央執行委員に選出されていました。青年部長というのは青年部組織の中で自主的に選ばれる役職です。部長と副部長は青年部大会の選挙で選出されると、自動的に専従となるけれども、それは全国

大会で選ばれた中執ではない。彼以前には、青年部長は中執になれないというジンクスが全通にありました。新井君は1963年の全国大会で中央執行委員に選ばれ、しかも政治・共闘担当となり、国際も彼が担当した。

1964年夏にベオグラードにいた私に、帰ってきて一緒にやらないかという誘いが彼から来ました。私もユーゴにいて、その後の展望を特に具体的に持っていたわけではありませんから、全通に入るために帰国を決意しました。全通書記局に入ったのが、1964年10月、東京オリンピック開催中でした。そして、全通本部に7年、その後全通が加盟していた国際組織(PTTI)のスタッフとして20年あまり、国内外において労働組合運動で働くことになったのです。

マルクス主義への違和感

構造改革論に接近した契機をもう少し補足して指摘させていただきます。従来からマルクス主義の経済中心の分析、経済分析からすぐに政治課題が導き出されてくるという発想には、非常に違和感がありました。というのは、私はもともと経済にそれほど関心がなく、むしろ人間を動かしてゆく哲学とか思想に関心がありました。経済決定論はあまりにも単純すぎ、人間を経済的な存在としてだけ見るものと思っていました。

それから、マルクス主義について私はあまりよく勉強していないので誤解かも知れませんが、真理が一つで絶対的という論理構成に疑問を持ちました。つまり真理というのが絶対的に一つ捉えれば、同じ場所に異なる二つのものが同時に存在しえなくなってしまう。そういう排他的な考え方にあまりなじめなかった。真理、特に社会科学における真理というのは相対的なもので、常に変化するものです。不変の真理

というものもあるかもしれないけれども、社会科学の対象になっているものには、不変の真理はないという考え方です。

2番目に、いちばん違和感を持ったのは、社会党に対しても労働組合に対しても、もちろん共産党に対しても持ったのですが、民主主義の評価が低すぎ、民主主義的なモメントを軽視していたことです。主要な戦後改革の中で、三つの民主主義的改革があったといわれます。農地改革、教育改革、労働改革です。二つ目の農地改革は、自分の家族と自分が立っている経済的な基盤があつという間に失われていく過程ですから実感がありました。あとから思うと、失われてよかった。下手に土地でも持っていたら、今のような自由な人生ははとでも享受できなかったと思います。

しかし、労働改革と教育改革によって、何か非常に明るい日差しが前途を照らしてきたことを実感していました。そういう面では、アメリカがただ全面的に悪いという主張に同調できない感覚を持っていた。アメリカの軍事基地に対しては反対するけれども、アメリカそのものに対して、ソ連がよくてアメリカが悪いというふうには実感的に思えなかった。

松下さんの指摘のように、民主主義というものを単なる参加の制度とか統治の制度としてだけ捉えるのではなくて、市民的自由の問題として理解することの重要性です。今は常識ですが、でも当時の左翼の中では、市民的自由などという言葉は存在しなかったと思います。あれはやはり松下さんたちのおかげです。彼が言ったロック（John Locke, 1632～1704）だとかヒューム（David Hume, 1711～76）の主張を松下さんの論文を通して理解したものです。彼の論文を読まなかったら、早くから目が開かれなかったと思います。松下さん自身の関心は、それから地方自治体や市民的組織とか具体的な現実課

題に移っていった。

佐藤昇さんは論文では非常に注意深く、慎重に述べているのですが、個人的な対話の中ではっきり言っていたように、政治的な民主主義というものが曲がりなりに確立されていれば、ほかの改革は政治的民主主義を通じてできるということです。政治的民主主義が確立しているところで革命をやれば、それは民主主義を否定する反革命になってしまう。これに同感しました。つまらない揚げ足を取られるのを避けるために、佐藤さんは最初のころの論文で明確には書いていなかったけれども、最後出した三部作ではそれをはっきり述べています。

これは佐藤さん独自の卓見というよりも、スウェーデンとかドイツの社会民主主義の立場でもあります。政治的民主主義を確立するためには、民主主義不在のところ民主主義を創出する場合には、そこには市民革命という革命が要る。ある場合には暴力的というか、非合法的な手段も使って革命が必要になるけれども、いったん政治的な民主主義が確立されたら、それを行使することによって他の社会経済的な改革が達成できる可能性が生まれる。

松下さんが指摘していることは、民主国家でもその権利行使が暴走してファシズムになることもあるし、黙っていると大衆社会化して受動的になり、市民が国家に取り込まれる。これは大衆社会論が指摘している危険です。

政治的民主主義を社会経済的な改革の手段として行使する可能性をもっと前向きに議論すべきだ。とくに社会経済的な民主主義を実現する上で、政治的民主主義の確立があれば基本的にできる、これが佐藤さんの主要な論点です。そこから、構造改革論を通じ社会民主主義を受容する道が開かれました。私は、佐藤さんとほとんど同じころにこの道に向かいました。

今から考えてみると、ドイツ社民党と日本社

会党の前途が、70年代に大きく明暗を分けました。ドイツの社民党は大きく伸びていく。他方、日本社会党は衰退していく。ドイツはヴィリー・ブランド党首（1913～92）以降活性化する。

それだけが理由ではないとしても、分岐の大きな要因は、ドイツの社会民主党（SPD）が、68年世代やその前の学生運動世代を、彼らの主張が必ずしも社民党と一致していないにもかかわらず、社民党の中に吸収していったことにある。社民党系で公的資金によって活動しているエーベルト財団などには、学生運動出身の左派的な人が多くはいました。そういう人はあとで多くが国会議員にもなっています。中には途中から離れて緑の党に行ったり、あるいはその後の左翼党に行った人もありますが、少なくともブランド時代には社民党が学生活動家を吸収しようとした。

江田さんのこと

江田さんが社会党で攻撃され孤立、そして離党にいたるまでは、私は直接接触があまりなかったのですが、社民連をつくるころになってまた江田さんとの接触が復活しました。江田さんが社会党の外に出るといったときに、今までの構革派で党内にいた人はほとんどが反対した。それに積極的に賛成したものとしては、私の周囲に限ると、江田さんにとても近かった仲井富、今泉清、それに少し離れていた僕の3人だった。ある時、江田さんをこの3人で囲んで話したことがあった。その時、江田さんは既に離党の決心をしており、それについて意見を求めた。仲井さんがまず「江田さん、それは1人でやったほうがいい」と断言した。江田さんらしい回答は「じゃあ俺は1人で行くから、お前らはついてくるな」だった。

僕は組合の中において社会党と距離を置いてい

たので、もともと江田さんにすぐついていくということは考えていなかった。仲井、今泉と一緒に参加する気持ちは十分にあった。離党が発表されると、江田さんはもう年だから若い人と組まないと新組織の将来がいけないということで、仲井さんと今泉が見つめてきて組ませたのが菅直人です。菅さんは物忘れがいいのか、あまり言いたくないのか、市川房枝までは出てくるけれども、江田三郎の名前を最近どこにも出さないな。今泉君たちは公開シンポジウムをやった、江田と菅さんを組ませた。

このときも、佐藤昇さんは新党路線を支持した。しかし、松下さんやほかの人はもうほとんど江田さんから離れていた。当時、構造改革を支持した学者の多くに、江田さんとの亀裂がひろがっていたと思います。その亀裂を生む一つの大きな理由は、江田さんが社民連をつくる以前に社公民路線を打ち出したことです。これには、江田グループの中でも多数の人が反対した。

佐藤昇さんや、私たちは政治プロセスにはあまりコミットしていなかったけれども、自民党を倒すには社公民しかないと思って賛成しました。とくに公明党との提携は、体質は違うけれども政策的にみればいちばん近いし、公明党と少なくとも選挙協力をしたほうがいいと考えました。労働組合内では、社公民路線が戦線統一との関連で強い支持があった。

当時私は全通周辺にいましたが、いちばん最初に公明党と選挙協力したのはこの組合でした。武部文さんを抱えた鳥取とか、静岡とかいくつかの選挙区で限定されており、全通本部が必ずしも主導したわけではなく、地方の構革指向グループの人たちが中心的な役割を果たしたと思います。

さいごに

構造改革派で党内にとどまった人々と、かなり早い段階で私はすでに離れていました。主として国際活動を通じてですが、1965年前後には社会民主主義の方向に政治的理論的に踏み切っていました。1961年から63年までロシアに3回にわたって滞在しましたが、ロシア社会の欠陥を見て、ああ、これはとても社会主義の理想から程遠い、おかしい社会だなということを痛切に感じていました。

63年にはユーゴに行きました。ユーゴについても、自主管理論に最初はすごく惹かれていたのですが、自主管理論についても実態なり、あるいは一党独裁と自主管理の関係等、疑問が湧きましたし、実践的にそれほどうまくゆくとは思えない印象を現地で持ちました。

それから今度は1963年の後半から64年の春まで、半年ほどイタリアのフィレンツェにいたのです。その前後からイタリアの共産主義青年同盟の人たちと非常に親しく交流して、彼らと非常に波長が合ったのですが、でもグラムシ・トリアッチ路線というものなかなか理解しがたいなという気がしました。

あるとき僕はイタリア共産主義青年同盟の友人に、なぜイタリアの議論はこんなふうに戻りくどくて直截的議論ではないのか、非常に分かりにくいと感想を漏らしました。例えば北欧とかイギリスの文献を読むと非常に分かりやすいと僕が言ったら、彼の返答は、先行社会の質が違うというものでした。「それらの国にはたいした封建社会の伝統がなく、非常に単純な先行イデオロギーだ。イデオロギー装置がイタリアみたいに厚みのある国で、2000年近くにわたって積み上げられてきたカトリックの教義と理論的に対抗しようとすれば、そういう論理と理論が必要だ」と。なるほどという気がしました。

イタリアのあの理論は読んでみて、松下さんや佐藤さんのものを読んだときと同じように、本当にストンと理解できたかということ、決してそうではなかった。少なくとも僕の場合は、イタリアの理論に大きな影響を受けて構造改革論を受容したということではない。今から思うと、松下さん、佐藤さんの理論を徐々に自分の中で吸収しながら、構造改革論から社会民主主義のほうへ移っていった。

佐藤さんとは晩年に話をしてみても、基本的に構革論以後の思想的な軌跡が似ていると思いました。佐藤さんも、行き着いたところは社会民主主義だといっておられました。佐藤さんの晩年は、社会党とか労働組合との関係がほとんど切れていました。最後まで佐藤さんのほうにある程度義理を尽くしていた政治集団は、公明党と月刊誌『潮』くらいでしょう。公明党とも矢野絢也さん（1932～）と元委員長長の竹入義勝（1926～）さんの当時までです。

草川昭三（1928～）さんという、ユニークな経歴の国会議員で、社会党構革グループや総評系労働組合と公明党をブリッジした人があります。草川さんの役割というのはあまり表には出ていないけれども、大きかったと私は思います。草川さんは石川島播磨の前身、播磨造船の委員長で、名古屋から社会党で2度立候補したことがありました。赤松勇（1910～82）さんと同じ選挙区で2回落選し、3度目は矢野さんと江田さんの後押しによって、公明党推薦でありながら、創価学会員でない最初の国会議員になった。今も国会議員中最高齢者として、矍鑠たる現役です。

あの人は学会員でないために創価学会のルールにふれず、65歳で引退しなくてよかった。労働界から見ると、草川さんの役割が公明党との協力を進めるうえで、非常に大きかったと私は思っています。（次号につづく）